

王朝文学文化研究会 土曜部会  
平成二十二年十一月二十七日  
学部一年市川直人

古今和歌集 春歌上 三十六・三十七番歌

【三十六番歌】

むめの花ををりてよめる

源常嵯峨源氏 左大臣左大将

東三条の左のおほいまうちぎみ

斉衡元年薨四十四

鶯の笠にぬふてふ梅の花

折りてかざさむ老いかくるやと

語釈

○東三条の左のおほいまうちぎみ―「おほきまうちぎみ」とは大臣のことである。「おほき」は名詞について偉大であるという意を添えたり、同じ位階、官職のうち上位の方を指す言葉。「まうちぎみ」は「まえつきみ」から転じたもので天皇の御前に伺候する人を尊敬するという言葉である。ここでは東三条に邸宅があり、左大臣であった源常のことである。嵯峨天皇の皇子で弘仁三年（八一二）に生まれる。承和四年（八三七）に左大将、承和十一年（八四四）には左大臣に任ぜられる。また、承和七年（八四二）には藤原緒嗣と共に、『日本後紀』の編纂にも携わる。緒嗣が亡き後は政治の首班に立ち、兄弟と共に嵯峨源氏として一大勢力をなした。斉衡元年（八五四）薨去。

○鶯の笠にぬふてふ梅の花―鶯が笠を縫うという梅の花。「笠」はかぶり笠を指し、「ぬふ」は笠を作ることをいう。「梅の花」はその形から笠に見立てられている。ここでは鶯が梅に寄ってきて、枝移りすることを笠を縫うと例えている。縫うからには糸が必要だが、この歌の本歌となっている一〇八一番歌から「青柳」を糸に例えているのがわかる。つまり、鶯が（青柳を糸に

して）縫った笠が梅の花というのである。

○折りてかざさむ―折ってかざそう。花を髪や冠にかざすことで神の依代とし、さらに花の生氣で不老長寿をもたらすとされた。

○老いかくるやと―老いた顔がかくられるかと思つて。笠をかぶると顔が隠れることから鶯の笠である梅の花を冠にかざすことで自分の老いた顔を隠そうとしている。

通釈

鶯が縫つて笠にするという梅の花を私も折ってかざそう、老いた私の顔が隠れるかと思つて。

余釈

生氣に満ちあふれる梅の花を笠に見立て、その笠をかぶることで自分の老いを隠そうとしている。

語釈でも触れたが、この歌は一〇八一番歌が本歌になっている。一〇八一番歌は催馬楽にもはいつており、「返しものうた」とは催馬楽の際に大和琴の調弦を呂から律に転調する時に歌う歌をいう。「柳」は漢語で柳糸とされ、よく糸にたとえられる。

資料

一〇八一番歌

返しものうた

青柳を片糸によりてうぐいすの

縫ふてふ笠はむめのはな笠

（青柳を片糸に撚つて鶯が縫う笠は梅の花笠であるよ）

【三十七番歌】

題しらず 素性法師

よそにのみあはれとぞみし

梅の花あかぬ色かは折りてなりけり

語釈

○素性法師―遍照の子で三十六歌仙の一人。（六番歌参照）

○よそののみ―遠い所からばかり。ここでは下の「折りて」に対して使われ、樹上の梅を觀賞することをいつている。

○あかぬ色か―いつまで見ても飽きることのない色や香り。「か」は香のことである。

○折りて―手折って。上で遠くから梅を愛でていたのに対してこちらでは手に取って見ている。

#### 通釈

遠くからばかり美しい梅の花だと見ていたが、その飽きることない色や香りは手折ってみてわかったことだなあ。

#### 余釈

今まで遠くから梅を眺めていたが、手折って近くで見ること新たに梅の色や香りのすばらしさを見出している。

また、ここでは「題しらず」となっているが、『素性集』では「んめのはなをひとにやるとて」など詞書がついている。このことからこの歌は単に梅の花を折ったのではなく誰かに贈ろうとしていたと考えられるか。

これについて松田も前後に「梅の花を折りて」という詞書がついていることからやはり自分で梅の花を折って人に贈った時の歌であるとしている。

これまででは色と香は続けて書かれることはなかったが、ここでは「色か」と書かれている。

現代では色香と普通に使われるが、当時の歌の中ではここだけ使われていない。

また、八代集でも『新古今和歌集』の四七、一四四五番歌（資料参照）に登場するのみである。この二首も現代で使われているような女性の色気は指しておらず、単純に梅の花の色と匂いのことをいつている。従って現代のような意味を持つようになったのはさらに時代が下つてからのことであるだろう。

#### 資料

新古今和歌集

四七番歌

皇太后宮大夫俊成女

梅の花あかぬ色香も昔にて

同じ形見の春の夜の月

一四四五番歌 花山院御歌

色香をば思ひも入れず梅の花

常ならぬ世によそへてぞ見る

#### 配列

三十五番歌

梅の花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみいる

三十六番歌

鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老いかくるやと

三十七番歌

よそののみあはれとぞみし梅の花あかぬ色かは折りてなりけり

三十八番歌

きみならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

三十五番歌では恋の感情を込めつつ梅の花を愛でていたが、新たに梅の花を折る歌が始まる。三十六番歌は梅の花を冠に差し、自分の老いを隠そうする歌である。ここから次の三十七番歌のいままで遠くからばかり眺めていた梅の花を手折って身近に見ることで梅の素晴らしさを再発見する歌につながる。そしてさらに次の三八番歌の梅の花を人に贈る歌へと続いていく。

#### 参考文献

新釈古今和歌集 松田武夫 風間書房

古今和歌集全評釈 片桐洋一 講談社

古今和歌集評釈 窪田空穂 東京堂出版